

新作と母親



「新作」という言葉を見たり聞いたりすると、ちょっと複雑な気持ちになる。それは、わたしが演劇という表現分野において、戯曲という形で新しい作品を作り続けてきたから人間だからだと思う。字面の清々しさとは裏腹に、それを作り出す苦勞を身をもって知っているからである。スラスラと夢のように完成した作品もあるが、だいたいはウンウン頭を捻りながら作ったものばかり。だから、「新作」という言葉を聞くと、その時の苦勞が頭の中を駆け巡り、ちょっと苦々しい気分になるのだ。

しかし、「新作」を作り出しているのは、何も才能の乏しい劇作家だけでなく、世の中のとあらゆる職業の分野の人々も同じようにそれを作り出している。映画、テレビ・ドラマ、小説、絵画、音楽などの創作物は言うまでもなく、新作の化粧品、新作の嗜好品、新作の電化製品、新作の料理、新作の飲料、新作の服飾、新作の乗り物など、その数は枚挙に暇がない。であるなら、「新作」という言葉を聞いた時、苦々しい気持ちになるのは、必ずしも戯曲を書く劇作家だけではなく、世の中のとあらゆる分野の作り手たちにも当てはまる気持ちなのかもしれない。

そして、わたしが「新作」という言葉を見たり聞いたりする時に感じるあの何とも言えない複雑な気持ちに最も近い気持ちを持つのは、母親ではないかと思ひ至る。何人も子供を出産し、子供たちを育て上げた母親が、「新生児」という言葉を見たり聞いたりした時の気持ちは、わたしのそれに限りなく近いものではないか。そこには、子供を産み出すまでの苦勞とそれを上回る喜びの記憶が、いくつも重なりあっているにちがいないからである。

高橋いさを

〈劇団シヨーマ主宰 劇作・演出家〉